

## 学位論文要旨

### 中級日本語学習者の文法項目の誤りに対するリキャストと与え方 ーアップテイクと訂正理由の理解に着目してー

高橋（菅生）早千江

第二言語習得研究 (SLA) において、学習者の口頭の誤りをどのように訂正すべきかという訂正フィードバックは、いくつもの理論やモデルが関わり、また教育実践への応用に直接結びつくテーマとして、盛んに研究されている。本論文では、訂正フィードバックの中でも、学習者の誤りの直後にコミュニケーションの流れを阻害しないように自然な言い直しを与える「リキャスト」という手法に焦点を当てた。

リキャストをめぐる主要な研究関心の 1 つは、リキャストがどのような文法項目に対して有効であるかという問いである。本論文の目的は、これまでは主に欧米語を対象に研究されてきた本領域において、日本語の動詞活用形、補助動詞、および助詞という特性の異なる項目を対象とし、さらにリキャストの与え方との関係も含めて検討することで、リキャストと対象項目の特性との関係について示唆を得ることとした。

本論文においては、上述の対象項目の誤りに対してリキャストを与えたときの、学習者の反応である「修正アップテイク」、刺激回想法インタビューを用いて探る「訂正理由の理解」および「修正と理解の関係」を研究対象として、4 つの研究を実施した。研究 1 では、項目間の異なりについて総合的に検討した。研究 2 では、誤りの語句のみを言い直すリキャストか、誤りを含む文を繰り返すリキャストかなど、リキャストの長さを分析の観点とし、研究 1 のデータを再検討した。研究 3 では、対象項目を含む複数の誤りを 1 つのリキャストで訂正するという条件の下で、修正アップテイク、および訂正理由の理解を項目ごとに検討した。研究 4 では、最もリキャストの訂正理由の理解が得られにくいと判断された助詞のみを対象とし、リキャストとメタ言語ヒントを与えるフィードバックとの併用を試みた。

対象者はアメリカの大学で日本語を学ぶ中級学習者である。対象項目の口頭産出を求めたタスクを実施し、誤りには研究 1, 2, 3 ではリキャスト、研究 4 ではリキャストとメタ言語ヒントというプロンプトの手法を併用した。4 つの研究すべて、タスク実施中の場面を録画し、タスク終了後にはその録画を再生しながら、フィードバックを受けている場面で何を考えていたのかを話してもらった刺激回想法インタビューを実施した。

研究 1, 2, 3 の結果、いずれの条件においても、特に補助動詞と助詞において、リキャストの訂正理由の理解が異なることが示された。研究 1 においては、補助動詞が最も訂正理由の理解を得やすく、助詞に対するリキャストが最も訂正理由の理解を得にくい可能性が

示された。研究 2 においては、アップテイクが項目によって異なった。動詞活用形および補助動詞は、修正アップテイクの有無に、リキャストの長短による差はないと解釈された。一方助詞ではリキャストの長さによる異なりがあり、短いリキャストは大半の事例で修正アップテイクを導くが、長いリキャストは修正される割合が半数以下であることが示された。

研究 3 においては、単独の誤りを訂正するときと同様、3 つの項目の中では補助動詞が修正されやすく、助詞が修正されにくいことが示された。また、複数語訂正においても、研究 1 および研究 2 と同様、助詞に対するリキャストは訂正理由が理解されにくいことが示された。

研究 4 においては、助詞を対象とした結果、リキャストを受けた誤りに次にメタ言語ヒントを受けても、訂正理由の理解が深まらない事例が最も多かった。また、用法に関する知識が不正確である場合、リキャストに加えてメタ言語ヒントを受けても正確な理解に至らないことが示唆された。

これらの結果を受け、リキャストが訂正理由の理解を導くことに関わる項目の特性を考察した。先行研究から、項目の卓立性がリキャストの作用に影響すると予測されていたが、卓立性の高い補助動詞と低い助詞の結果を比較すると、卓立性はアップテイクには影響するが、訂正理由の理解には別の要因が関係していることが示唆された。リキャストの訂正理由が理解されるためには、対象項目の卓立性だけではなく、項目の意味の明示性、内容語との「かたまり」で項目学習されるという対象項目の特性、および対象者の項目に関する明示的知識の有無が影響していると考察した。また、アップテイクとしての修正の有無は、リキャストの訂正理由の理解には関係しないと判断された。

本研究の意義は、類型論的に欧米語と異なる日本語を対象とし、先行研究の知見との共通点および相違点を見出したことである。先行研究では項目の卓立性がリキャストの有効性に関わるとされていた。本研究では、日本語の語順や音韻構造がリキャストの卓立性を高めていたものの、卓立性は修正アップテイクのしやすさには関わるが、訂正理由の理解が項目間で異なったことの、主たる要因ではないとの見解を示した。意味の明示性、明示的知識、項目学習が関わることは、欧米語の先行研究に沿っていたと報告した。本研究は当該領域の基礎研究として意義がある。